



81

大会学画学大  
学会

1988.12

大会学画学大

The Committee of Universities of Art for Print Studies in JAPAN

12回大学版画展は町田国際版画美術館との初めての共催となり、美術館側を始め運営委員の方々特に事務局の日大には大変煩雑なご苦勞をお掛けして、漸く開催することが出来感謝する次第です。出品者は予想以上に点数も多く大作が目立ち一部展示でご迷惑をお掛けしたようであるが展示係りの学生達の大変な努力で新会場での初めての展示としては大成功であった。

オープニングの翌13日日曜の発表日は思いも掛けない12月の大雪となり、人が集まらなくて、研究発表の中止その他有っては大変と予定をキャンセルして、町田に向った。会場はすでに全国から集った多数の会員でうまり実技発表も順調に開始され、大学版画展、研究発表、パネルディスカッションと大学版画学会の発表が総合的に盛り上りを見せて行なわれた。あの大雪の中であれほど盛會に連日行なわれたのは、美術館との共催によってより新しい展望を得たからであろう。

「版画は版で作った絵画ではなく、版画として独立した表現である」と言うのが駒井哲郎氏の持論であったが、我れ我れもそのように考へ、その故に版画の独立した美術館の無いことを不思議に思っていた。日本が世界に誇る版画、陶芸の内陶芸は国立近代美術工芸館の開設によって拠り所を得たが。版画は街の個人美術館のみで、漸く今、公立の町田国際版画美術館を得て日本の版画の核が出来た訳で、10年、20年の年月と共にこの美術館の設立意味は光りを益して来るだろう。

12回大学版画展から始まった美術館での作品買上収蔵は版画が美術大学で広く取り入れられ始め

た今日、自画、自彫、自刷りを提唱して始まった、創作版画に続く独学的版画家達からより高度な設備と技術を体系的に大学教育の中で身に着けた専門的版画家を輩出して来た、日本版画の技術的水準はぐんと上って、今日、66大学・150名におよぶ指導層から選出される、大学版画展の買上者達から、その年の日本版画協会の受賞者又各種コンクールの受賞者が出る現状は大学版画学会がこれからの日本の版画家の大半を養成して行くことになるその学生達に取って、大学版画展が最初の登龍門で有る。学生に取ってこの買上・収蔵が初めての画歴であり「大学版画展買上、町田国際版画美術館収蔵」は彼等の誇らしい初陣の旗印として画歴の一頁を飾るだろう。30年、50年の才月が過した時、収蔵された美術館の作品はそのまま日本の近代版画史となり、それは、大学版画学会の努力の精華ともなるでしょう。

12回韓国弘益大学の出品に続き、13回はニューヨークの大学が参加します。ニューヨークには5～6校の大学が有るがあまり多くの展示面積を取れないので1～2校30点程度と言うことにした。来年は東南アジアの国々を予定しており毎年各国大学との交流を深めて行き町田国際版画美術館が日本の版画の核であると共に世界に開かれた日本の窓口になることを願う次第です。

日本の大学版画学会の働きかけで韓国に版画学会が出来、韓国の弘益大学に今年4月から版画科が設置されたように国内外をとわず版画教育の為に学会の果たす役割りは大きい。





為金義勝



深沢先生による公開制作



小作先生による公開制作

第12回大学版画展（昭和62年度）は、町田市立国際版画美術館に於いて開催され盛況を博したが、中でも注目を集めたのが、会期中に行なわれた研究発表である。12月13日（日）に、町田市立国際版画美術館のアトリエと大講堂に於て行なわれた研究発表会の内容は以下の通りである。

### I. 公開制作

イ)「石膏刷り（プラスター・プリンティング）」について

発表者：設楽知昭氏（愛知県立芸術大学助手）

ロ)「木版リトグラフ」について

発表者：小作青史氏（多摩美術大学教授）

ハ)「電動ベルソーによる制作」について

発表及び出品者：

深沢幸雄氏（多摩美術大学教授）  
池田良二氏（武蔵野美術大学助教授）  
白木俊之氏（筑波大学助教授）  
馬場樗男氏（東京造形大学教授）  
鹿取武司氏（版画家）

### II. 公開討論会

タイトル「現代の版画とは」(今、何故版画なのか)

パネラー 野田哲也氏（東京芸術大学教授）  
園山晴己氏（東京造形大学講師）  
河野 実氏（町田市立国際版画美術館学芸課長）

馬渡響子さん（女子美術大学学生）  
石田民己さん（東京造形大学学生）

司会 吉田穂高氏（日本大学芸術学部講師）

設楽氏の石膏刷りに関しては、会報17号に於いて述べられているので、今号では公開討論会と、小作氏の木版リトグラフ及び鹿取氏の電動ベルソーについて掲載する（深沢氏の研究に関しては、既に幾度か発表されているとの事で、今号では割愛させていただく事となった）。

●公開討論会「現代の版画とは」(今、何故版画なのか)

多くの学生や一般市民が見守る中で行なわれた、この討論会は、まず園山氏がテーマへのアプローチとして版画の現状を分析するところから始められた。即ち、

1. 版画というものがエネルギーが豊富な状況にあり、美術におけるウェイトが大変高くなっている。(国際的な版画の位置づけ)

2. 国際美術館もでき、大学で版画を専攻する学生数も飛躍的に伸びている。(国内での版画の位置づけ)

3. 社会的に大変関心が持たれている。(一般的な版画に対する位置づけ)

という3つの状況が重なっている事を指摘する一方で、裏に隠された問題点をほのめかした。

それに対し、野田氏からは作家としてのアプローチが提出された。即ち、自分の中での「絵画」の延長線上に版画が位置するという事であり、版画の複数性は技法から出てくる結果である。そこから敷衍すると、「今、何故版画なのか」という問いかけに対して導き出される結論は、「現代」の表現に（技術的にも）対応できるメディアであるからだという事になる。

また、河野氏からは町田市立国際版画美術館設立にも絡めて、版画の持つ意味（美術というだけでなく、社会的・文化的側面から）への問いかけがなされた。

園山氏から、社会的対応の遅れ（関心が持たれているにも関わらず）や研究機関の少なさから、「今、何故…」ではなく、「今、もっと版画を」との強い意見が出され、それを受けて野田氏より日本の版画の伝統も受けて、版を表現の手段として選ぶ人が増える一方で、技術偏重を避け、「版画家」という狭い分類にこだわらず、より広い視野を持たなければならないとの意見が出た。

討論は、学生や一般市民も参加し、内容もエスタンプの問題にまで及び、時間も延長して大いに活況を呈したが、結局、今こそ『今、何故版画なのか』を一番考えなければならない時代ではないか（学生・馬渡さん）とのまとめで幕を閉じた。



## 「木の版によるリトグラフ」

大学版画展も12回展からようやく大阪フォルム、丸の内画廊という私的な会場から、町田市立国際版画美術館という公の場で開催される事になりました。各大学間の学生の制作物を持ちよっての交流の場にすぎなかったものが、それだけではすまなくなり、外にむかっての積極的な活動がもたらわれています。

そのではじめとして他の研究発表といっしょに、私の木版によるリトグラフの公開講座を仰せつかったわけです。

開会2日目で、あいにくの大雪にも関わらず、美術館の制作室いっぱいの人達に集まってもらいほっとしましたが、いささか緊張しました。

はじめに、私が木版によるリトグラスにまで、行きついた道筋から話しをはじめました。

大学2年次、リトグラフの講習会をのぞいた時から始まり、それが1957年ですから今日まで約30年も関わっている事になります。

リトグラフは梅原政幸、脇田和、女屋勘左衛門、の諸先生に、銅版画は松田義之、駒井哲郎先生、木版画は小野忠重先生にと、新しく講座が開かれるごとにその技法をためてみました。

しかし、リトグラフを最初にやった事もあってか、この技法にこだわりつづけました。

しばらくして、リトグラフの水と油が反発しあうという原理は、化学的なもので、凸版とか凹版のような物理的な事ではなく、平らな版面でも版として成り立つもので、どの様な版形式でもよいのだと気がつき、その原理を他の版種にも応用できないかと思いました。

そこで銅版画(凹版)にこの原理を使って腐食されてへこんだ所だけを油性にしてインクが入るようにした方法を考えました。これは後になって、へこんでいても油性にしない部分も作る事で1版多色刷りの技法に発展して行きました。

木版画では、リトグラフや銅版画用のプレス機がみじかにあったので、はじめからプレス機で刷る事を考え、木口木版のリトプレスによる刷りや、板にニスを塗りわけ、ほりこみ、凹版的な表現などを試みました。この方法は後に、多摩美大に移ってから思い出して、学生達にやってもらい、今では木版画の基礎技法のなかに入っています。木

## 小作青史

版とリトグラフの原理とのむすびつきは、だいぶ後になってからです。両角修君(多摩美大卒業生)、クギで小さな点を無数に打った作品を発表していますが、その彼から、その小さな点がすぐつぶれてしまう悩みをきいた時からです。

その小さな点、穴に水が入って油性を反発する様にすればと考えました。和紙にドーサをひく事をしますが、木の版面にもドーサをぬり、木の繊維のすきまにニカワ等を充填して油性のインクが滲んで行かない様にすればと考えました。会場ではドーサの説明がよりわかりやすくするために、ゼラチンで作ったお菓子のプリンを用意しました。そのままのプリンと、クローム明バン入りの2個を用意し、湯のなかに数分間つけ、明バン入りのプリンだけが型がくずれないでいる事を見せました。この様に明バン入りのニカワやゼラチンを塗る事で木の繊維の中で、水をすってふくらむが、とけ出さない性質に変わった事を理解してもらいました。

1、最初に両角君と同じ方法で、クギで無数に点をうった版を、多摩美大助手の松村君に作ってもらいました。その上に乾燥の早い油性インクをつけ、乾いた時点で穴のなかにドーサを塗りこみ、アラビアゴムをぬった版をあらかじめ用意し、会場で水あらいして穴のなかを保水してインク盛りをする。

2、2枚目は、木の版面を油性にして、それをスクレパーやカッターの刃等でケズって絵を作りドーサぬりをする。前の版とは油性にする所とドーサ塗りの順序を逆にしたもの。

3、なにもしていない版面にドーサ塗り、アラビアゴム、彫刻刃やニードルでほりつけた版を用意、そのへこんだ所に油性のチンクタルを塗りこみ、水洗いすると凹版部だけが油性になる、凹版形式のもの、この3枚を用意して松村君に手伝ってもらい刷ってみました。この様につぶれ防止がきっかけで始めたこの方法も凹版になり、つぎの段階として平版に移行。今回は時間の都合で平版技法まで見せる事ができませんでしたが、私にとって平版的表現は筆による自由さとか、木目を生かすために余白を考える様になり、ヨーロッパから入ってきたリトグラフの技法もこの様なかたちでやまと化できるかもしれません。



メゾチント電動下地製版機の開発経過(1)

他の版種では替え難い、漆黒ともピロード状とも言われるメゾチント独特の深い黒。私もその魅力に取り付かれた1人である。この黒地はベルソーによって作られるが、ベルソー操作で箸も持てぬくらいに腕を痛くした経験は、メゾ制作者にとっては誰も共通の体験であろう。「ベルソー操作の苦痛に耐えて、始めてメゾチント制作の出発点に立てる。」と自からに言い聞かせつつ制作を続けて来たのは、私だけではないはずである。

ところが、このベルソー操作から開放される時がやって来た。電動下地製版機によってベルソーによる苦勞をしなくても、メゾチントができる情況が来た訳である。昨今では何人もが電動製版機を自作し、画材メーカーからも市販されるに至った。その情況の背景には、下地製版の多大な労力と時間的拘束から開放されたいと言う強い欲求があり、さらにはメゾチント人口の増加などもあっての事と思われる。しかし、案外メゾチンターにはなまけ者が多い、と言うのがほんとうのところかも知れない。

さて、なまけ者の1人である私は、電動下地製版機を比較的早くから自作し、改良などして来た。初めて深沢さんがチンタラ号を完成した頃、私も1号機を作り上げ、その後2号機、3号機と改良し、現在は4号機の構想をまとめているところである。

私はメゾチントに関心の高い人には電動製版機の自作を勧めたい。自分の表現に見合った下地が得られること、時間は多少かかるが比較的簡単に作る事ができると思われるからである。製版機の機能や性能については以下詳しく書くが、手作業とは比較にならない製版能率の良さ、あくまで

均一な製版面が得られることは何物にも替え難い。

そこで私の下地製版機(メゾチントの発明者に因んで愛称ジージンと言う)であるが、1.第1号機に当るジージンI、2.一応実用機として完成したジージンIIの開発経過と、3.メゾチント下地製版面と表現効果の関係について今回報告し、4.360mm幅の大型ベルソーを使ったジージン360と、5.切れ目なしの目立てができる円形ベルソーを用いたジージンR、さらに6.製版機の具体的応用例については次回の報告としたい。

1. ジージンIの製作

目立ての際、版面上のベルソーの挙動は、左右への振り、版面への押圧、前進速度の3要素で把握される。従ってこれを制御し電動化すれば、自動製版機ができることになる。私は電動化の機構を考えるのに、かつて使われていたベルソーに取り付けた補助器具①を参考にしなかった。右腕でベルソーを保持し、版面上を前進させる手作業の形態から1号機②の構想を考えた。2本の丸棒をレールとしてパイプを通し、それにモーターを直接載せた本体を固定し、前進できるようにする。ベルソーの押圧はバネによる調節とし、前進にはわずかな力が掛ければ良いので、ワイヤーに重りを付け引くことにした。左右往復運動のクランク機構③には、ちょっとした工夫を懲らし、全体にはいささか不格好なところもあるが、コンパクトに仕上げたつもりであった。ところが実際に稼働させて見ると、思わぬ欠陥があった。目立て面に不均一が生じたのである。中央部が弱く左右で強い目が立ってしまう。最初その原因が良く分からなかったが、結極ベルソー幅が狭い(2.5インチ)

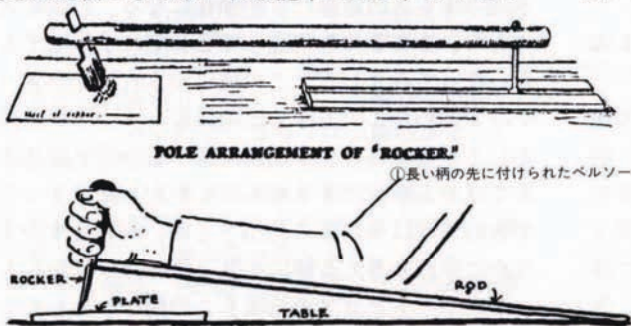


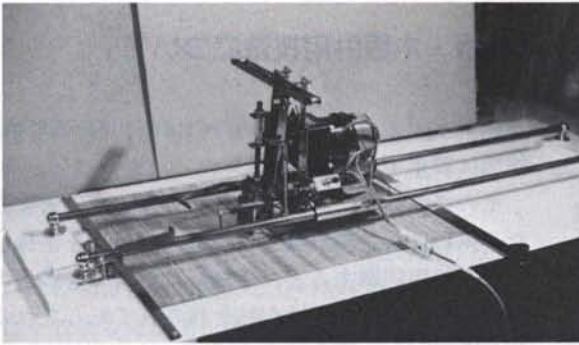
FIG. 108. Method of using the mezzotint rocker.

①直進性は確保しやすいが製版能率はさほど向上しない

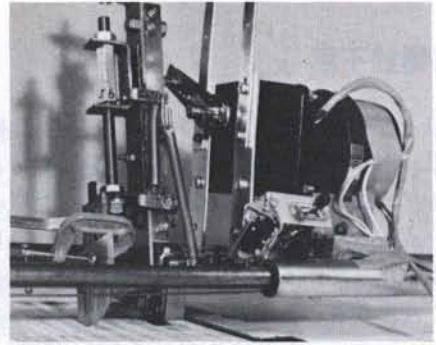


①ベルソー取付け器具の一例





②ジージンⅠ全体 2.5インチ幅のベルソーが先に付けてある



③ジージンⅠのクランク機構

こと、クランクの構造そのものとバネによる無理な力により、不均一が生じたと分かった。また密度を高めるために、重りを軽くして前進させると、ベルソーが自から刻んだ目に引っ掛かり、同一箇所を左右振りをしてしまう問題も起った。

目立ての不均一はわずかであり、最終的には数十回ベルソーを版面上に往復させるのであるから、全く問題にならない程度ではある。引っ掛かりについても稼動中そばに付いていれば良いが、それでは製版機としてあまりにも不安定で、気に入らずすぐに機構そのものを考え直し2号機へと取り掛かった。ただ、初めて電動による目立てが実現し、手作業ではとても得られぬ整然とした目立て面を見た時は、大喜びしたものである。

## 2. ジージンⅡの製作

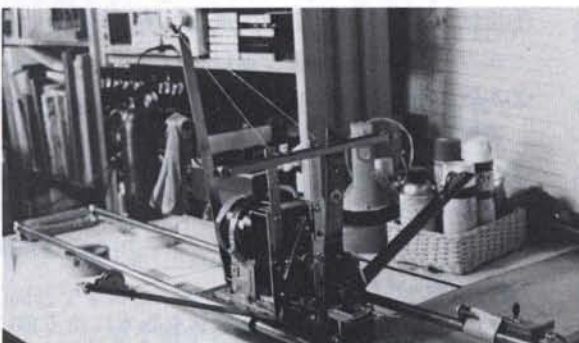
ジージンⅠの欠陥は製版機の構造自体に起因している。すなわちクランク機構そのものとバネで押圧を掛ける点が問題である。その2点を変更し一号機を改良したものがジージンⅡ④である。まずベルソー圧であるが、左右に振られている時も常に一定に垂直方向に数kgの力をかけるのがなかなかむずかしい。方法はいろいろと考えたが、刃先を無理なく、しかも十分な力でソフトに版面に当てるためには、結極ベルソー自体に重さを加え

るのが最良のようである。ジージンⅡでは刃先に直接重りを付けるスペースがないため、ワイヤーを本体の下を通し、後方へ回してけん引する重りを下げた。クランクも全面的に変更した。ここではワイヤーをクランク棒替りに用いて、モーターの回転を水平往復運動に変えることにした⑤。

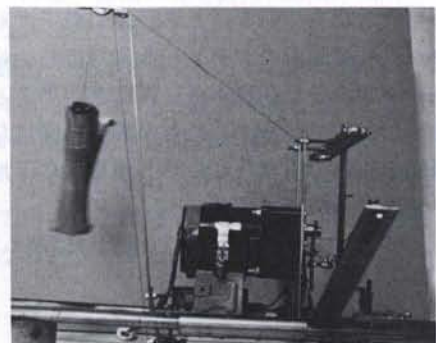
なぜこんな複雑で変な形を考えたかと言うと、ただアトリエが狭く場所がなかったからである。機関車の車輪のようなクランクを用いれば最も簡単にできるが、何とか小さくできぬものかと考えた苦肉の策であった。(3号機になりクランク機構は原点に戻ることになる) ジージンⅡの製版面は非常に均一で、密度も押圧も十分に設定でき、ベルソーが引っ掛かることもなかった。実際ジージンⅡは作品制作に多に活用した。一辺が80cmを超える大型作品などに挑戦できたのも、ジージンⅡあってのことである。

## 3. 下地製版面と表現効果の関係

十分な量のインキを保持する版面を作るために、何も無理をしてベルソーをモーターで駆動する装置を作らなくても、他に方法があるのではないかと思われる。十分な黒さの面を刷り上げるだけなら、実用的な方法としても種々あろう。しかし黒の質と、何よりも豊かな中間調となると、ベルソ



④ジージンⅡ 鳥の様な形が特徴



⑤動力、押圧の伝達がすべてワイヤーである



「銅版・木版併用技法について」

一以上のものではなく、かつベルソーが特に優れている。刷りの対圧安定性においても同様である。ベルソーはビュランの先端を連続させた様な刃先で一点一点刻点を穿ち、その点の集積で砂目状の表面を作ってゆく。この刃先で銅板面に穴を掘り、まくれを作ることが重要で、堅いもので傷を付けたり、へこませたりするのと根本的に異なっている。従って刃物ではないルーレットなどと効果は当然ちがって来る。

ベルソーがおそらくメゾチントが発明されて以来、連綿と使われ続けて来た理由は、このような点を穿つ器具が他に見い出され得なかったことによるのであろう。

ところで、メゾチントにおける理想的な下地製版面とは、どのような状態であろうか。版面の物理的状态がどうあるべきかは、作品の表現意図との関係で決定されるから一元的に述べることはできない。従って刻点の集積密度や深さも様々な範囲のものが使われてよい。しかし、下地が最終的な表現に決定的な限界や制約を与えることに留意すべきである。すなわち最初に用意した下地を超えて表現することはできない。

最終的に表現されるあらゆる明暗の階調とマチエールは、すべて最初の下地の中にある。下地製版終了の段階で版を刷れば、黒一色であるが、その黒は言わば白色光が七色すべての色を含んでいるように、すべての明暗の階調を内に含んだ黒でなければならない。従ってメゾチントにおける下地製版は、最終的な表現内容を決定するものとして極めて重要であり、かつ微妙である。

十分に目の立った版画を微細に観察すると、穿たれた小孔とささくれで全面が埋め尽され、緻密な砂目状となっている。この砂目の粒子の形状と配列が、作品画面のマチエールに対応し、粒子の粗密が階調の乏しさ豊かさに、深さが黒さと奥行き感に対応している。これらが表現意図に見合った適切な状態で用意された時、理想的な下地製版面と言うことができよう。

(以下次号に続く)

私が木版画を作りはじめたのは昭和24、5年頃、銅版は27年頃から作り出した。

その後、レリーフ銅版の技法を私なりに考案した。銅板に針金や鉄板、亜鉛板、銅板等を溶接し、これを凹版印刷すると、溶接した針金や金属板の肩の部分のインクだけが拭き残されて転写される。しかもプレスの圧力により紙がレリーフ状になる。とかく銅版画は細密な画面と近視眼的なものに偏り易く、そそんなことに反撥もあって大味な手法を私なりに試みたのである。

やがて思いついたのが、この銅板を骨組みに鮮明な色彩を加えることであった。

私は木版画の多色刷りに関しては浮世絵版画に勝るものはないと思っていたので、色彩は水性絵具を使い、パレンで刷る方法を選んだ。こゝで行き当たったのは紙の問題であった。

和紙は墨をはじめ水性の絵具のために改良進歩した。これに対し洋紙は油性インクの印刷に供するため改良を加えられて来たものと解釈出来る。

私の併用版には種々の条件から和紙を使うことにした。しかし和紙と言っても楮、三桮、雁皮等の種類があり性質もそれぞれ異なっている。鳥の子紙は木版の刷りには適してはいるもの、私の場合、強度が不足している。

最終的に生漉楮紙を使うことに決めた。これを選んだ理由は、繊維が長く、レリーフ銅版を刷る際、紙を湿してプレスを通して破れないこと、木版と銅版とでは刷る前に紙を湿す度合いが違うので、水による伸縮性が少ないためズレが少ないこと、等の条件を満たすことだった。

さて、こゝで実際に刷る時の行程を順を追って説明すると、

- ①用紙を水刷毛で湿らせて重ねた上、新聞紙に挟んで外側はビニールで包む。
- ②木版の第一版、(地色)を刷り台にキャンパス釘で固定する。
- ③絵具(不透明水彩)を皿に出し、水を加え版面に刷毛で塗り、用紙をのせパレンで刷る。この時、版木の上下に印したピンホールの痕跡が画面の端に現われる。
- ④第二版を刷り台にのせ、絵具を版木に塗る前に



## 宮下登喜雄

用紙をのせ、第一版で印されたピンホールに合せて裏から針を通し、第二版のピンホールに合せ、紙をめくって絵具を版木に塗りバレンで刷る。

第三、第四版も同様な作業を繰り返し続ける。

この作業は刷る枚数により一括して行なう。例えば十枚刷る時は第一版を十枚刷った後、第二版の工程へと移行する。

木版の全工程を刷り終わったら、一旦紙を乾燥する。水性絵具でも一度乾くと、次に湿した時に或る程度耐水性を持つものである。

銅版を刷る際には、改めて紙を裏から水刷毛で湿らせる。この時は木版を刷る時より充分の水分を与える。プレスには厚さ1cm以上のフェルトを準備し、銅版には凹版を刷る要領でインクを詰め、拭き取りをする。インクは自家製を使う。凹版インクは市販のものでは拭き取りの際に地色の部分が純白になりにくいのである。これは銅版画にとってはむしろ必要なことなのだが、私の作品は地色に鮮明な色を求めため濁ることを避けるためである。フェルトが薄いと鉄板と鉄シリンダーによる圧力でフェルトが銅板上に溶接した金属片や針金の凸部で紙と共に切れてしまうのである。

以上が刷りの工程で、順序は逆になるが、次に製版の工程を述べることにする。

製版は銅版からはじめる。

- ①銅版を磨いてから針金や金属片を溶接する。溶接する銅の小片にはメゾチント、アクアチント、エッチング等、時には写真製版した亜鉛板や銅板を使うこともあるが、すべて溶接する前に製版されたものを使う。  
凹版が出来上ると版面の上下両端にニードルで点を刻する。このピンホールが見当となる。
- ②銅版と同寸のシナベニヤを色版に必要な枚数用意する。
- ③黒インクで凹版を一枚刷る。刷った用紙を表を下に合板の上にのせ、バレンで刷る。合板上には凹版インクが転写される。この時、ピンホールを明確に転写する。この作業は色版の枚数に応じて繰り返し行なう。
- ④同じフォルムが転写された合板は、それぞれ色刷りに必要な部分を残して周囲を彫り取って色

版が完成する。

こうして文字で説明すると至ってスムーズに作業が行なわれるように思えるだろうが、誰しも同様だろうが、ここに至るまでには様々な思考を私なりに経た後に出来上ったのである。例えば見当にしても、和紙の耳を切り落したくなかったし、余白を自由にとるには紙の端にカギと引きつけの見当は不向きであったこと、また、銅板は板の大きさがイメージ寸法となりカギ見当を使えないこと。次に溶接だが、溶接と言っても私のは最も素朴なハンダ付けによる溶接だが、これも最初はなかなか思うように行かなかった。コテの熱でハンダを溶かしても大きな銅板に接すると熱伝導により固まってしまう。これには銅板そのものを熱して溶接することで解決出来た。フェルトも普通のエッチングプレスに使う厚さのものを使うと溶接した部分はその形通りに切断されてしまうので厚手のものにした。厚手のフェルトを使うとプレスのハンドルを廻すのに数倍の力を必要とする。昨年ニューヨークの版画工房でレリーフ銅版を刷っている所に遭遇したが、そこでは3ミリのフェルトの上に5センチのスポンジラバーを敷いてスポンジの弾力でフェルトの切断を予防出来るとのことだったが、私はまだ試みていない。

紙を選ぶのにもいろいろと試してみても生漉楮に落ち着いたのである。はじめに前記のように木版の刷りを考慮して鳥の子を使ってみたが銅版の刷りの際、破れたので最上質の生漉鳥の子を使ってみた。破れは何とか避けられたものの伸縮性が大きく見当が合わない。そこで種々の紙を同じ長さに二枚ずつ切り、一枚を湿し、他の一枚は乾いた状態のままにし、伸縮の差を計った結果、楮が一番、差が少ないことが解った。

私が銅版、木版併用をはじめたのが1964年、以来、25年経ったが、まだまだ完璧なまでには至っていない。また新しい素材や技法も採り入れる余地は残っている。まして作品の内容は時と共に移り変わって行くので終着点には当分の間、到達することはなさそうである。



「私の制作」

吉田穂高

最近「一点中継・つくる一版画家吉田穂高」という番組がテレビでありましたので(NHK総合テレビ10月23日夜放映)たまたま御覧になった方もあろうかと思えます。主として美術家、時には工芸家などの人間国宝級から、現代美術の若手などまで巾広く夫々がある一点の作品を黙々と、あるいはぶつぶつ何か云いながら制作する様子をひたすらに追うといった毎週日曜深夜の放映で、地味ながら結構な番組のようです。

ごく簡単な打合せから二週間の準備期間一つまりそのための新作の版をほゞ彫り上げるところまでやっておいての中一日おいての四日間の撮影。街中でのカメラによる取材光景のロケまで入れて約6時間分の収録でした。シナリオ的なものなど勿論ないので、ごく通常の心がけつつどうやらその一点を擦り上げてサインを入れるところまでやったわけです。

ところでこの6時間を20分にディレクター氏がまとめるのだそうです。これは考えてみれば大変なことです。テレビ作品としての制作、編集作業が大変というのではなくて、切り刻まれてどう料理されてしまうかもしれないこちらが考えてみればヤバイということです。もとのテープが長ければ長いほど、どこをどう切り取られて、どうつながれるかによって、どうとでもとれるものになってしまうはずだからです。自作について何かわけのわからぬことを口走ってしまった部分などなおさらです。果して私の作品のコンセプトや制作熱意が正しく伝わるものになるのだろうかどうかとても心配でした。

そしてまた2週間が経って、放映の日です。ちょうど野球の日本シリーズの日で時間も常時よりちょっとおそく新聞のテレビ番組にも名前まで載っていないということはいさ、か残念でしたがともかく「一点中継・つくる」が始まりました。とてもよくまとめてあるのに、さすがとびっくりしました。とてもささいなことにやかましいはずの

私の家族にもとても好評です。一、二ヶ所の細かいミスもあったものの私としても十分満足をしました。

版画にはもちろん素人のディレクター、カメラ、照明、音声の四氏による制作のわけですが、大変わかりやすくもあって、撮影中はほとんど何も云わず、何もきかなかったディレクターがほとんどよくわかってしまっているのにはほんとに感心、です。

ところで、こんなことをダシに学会の研究発表？をやれということになったのですが、事実このテレビを見た上での専門家仲間の物言いなどもあるので、やはり生の公開制作めいたものも意味あるのかなと思ひもします。私は、版のプロセスの中でも自分でやらなくてもよい部分、やらない方がよい部分は、つとめてひとにやってもらう心がけているのですが、「版」の作業的部分では「刷り(摺り)」を重視します。版づくりに関しては、「彫る」ことそのものよりも版の組立てを重視します。

“画”の部分には、もちろん制作の90%以上を占めると思いますが、近年の私の制作では殆んど〈物〉を抽出する作業に終始します。私の〈物〉のコレクション(カメラによる)の中から、その100に1つぐらいを選択しその本来の環境の中から完全にその〈物〉のみを抽出し出来得るかぎり手を加えずそのままに提示するのが「私のコレクションより」シリーズ。ある日常的風景の中から、もう一つの風景を抽出するのが「もう一つの風景」シリーズというわけです。抽出した物たちを、そのままにもっとも単純な私の空間にアレンジしてみるというふうにも云えるでしょう。

こじつけめきますが、抽出し、アレンジする作業は、6時間のテープを20分に縮めるなどのテレビ作品の作業とかなりの部分一致します。そのままの素材でも抽出とアレンジの仕様ではいかような意味合いのものにもし得るように思えます。そんなことを考えました。



「ペンシルバニア大学(アメリカ)での研修・思いつくまま」

浜西勝則

1987年度の文化庁在外研修員として、フィラデルフィアにあるペンシルバニア大学、芸術大学院に席を置き作品制作・並びに版画教育の内容方法について研修した。ここペン大(ペンシルバニア大学の略称)は1740年にベンジャミン・フランクリンによって設立され、総合大学としてはアメリカ最古を誇るアイビーリーグの一つとして知られる。かつて我が国からも野口英世などもここで学び、現在なお日本から多くの学生・研究者が集う学舎でもある。蔦が繁る石造りの古い校舎が立ち並ぶキャンパスには、クレス・オルデンバーグ、トミー・スミスあるいはアレキサンダー・リーヴァーマンなどの現代彫刻が点在し、伝統と現代とが調和している好例を見せてくれる。大学付属の博物館には大学が独自に学術文化調査のため、学者をエジプト、ギリシア、近東などに派遣し収集した品々が展示されている。スフィンクス、ミイラなどなどその規模・品質たるや一私立大学がなせる業かと思わせるほど立派なコレクションを蔵する。フィラデルフィアを訪れた観光客などよく立ち寄るルートにもなっている。その他、すり鉢型の野外フィールド・テニス場、プールなどスポーツ関係の施設も整っており、これ等は我が国のように一部の運動部だけのものでは無く学校に関係しているすべての職員・学生に解放されている。加えて家族バスも発行されるため週末ともなると子供達の姿も見受けられる。

私も夕方にスタジオでの仕事を終えると近くのプールに出かけサウナで汗を流し、ひと泳ぎするのが日課であった。おかげでアメリカ滞在中はすこぶる体調が良く、一度も風邪などひかずに済んだ。

私が所属した版画研究室は中里斉教授のもと、版画専攻の学生はもとより油彩、彫刻、建築科の学生なども交ざり常時、14、5名の学生が出入りしていた。新学期の始まる九月、十月には版画の基礎的知識・技法をほとんど持たない油彩、彫刻専攻の院生を対象に講座が開かれた。

'87年度には木版・石版・銅版・孔版の一通りの説明会の他にコログラフ、フォートによる版画の講座も開かれた。時には彼等の仕事の中に技法的



中里教授による新学期ガイダンス

基礎知識を持たぬが故に、技法に囚われない自由な発想の作品が生まれることもある。板に直接インクで描き紙に転写するモノタイプの作品印刷した作品にコラージュ、手彩色を施すなどはまったく抵抗無く行う。これ等の傾向は、ここペン大の版画研究室に限ったことではなく、現代のアメリカ全体の版画にも言えるよう感じる。

フィラデルフィア、ダウントウンにあるプリントクラブ主催で毎年開催されるコンペティションにおいても、'87年度展ではモノタイプの作品が全出品作の三割強、ハンドメイドペーパーによる作品が二割強をも占めていた。

学生の作品の内容に関しては、担当の教師である中里教授の指導で個人面談の形態をもって行なわれる。技術偏重に陥りやすい版画教育を極力、イメージ主体に指導される。学生より提出されたプラン、作品を土台に質疑応答を繰り返し、よりよい内容、方法を探り出す。先ず学生には己の作品を徹底的に言葉に、可能な限り具体的な言葉に置き換えることから始められる。提出した作品を美術の歴史の中で位置づけ批評の糸口を探ることもある。いかに己のイメージを最大限に造形たらしめるか、そのためには版画のジャンルにこだわらずタブロー、立体で表現してもかまわないというのが中里教授の教育方針のように見受けられた。とかく指導者の趣向に片寄りがちな造形教育の弊害を正す方法として、ここペン大の版画研究室では、ビジュアル・アーティストあるいは美術批評家を積極的に招聘されている。'87年度には



講演会

講演会



塚口重光氏による木版 特別講義

西ドイツで開催されたカツセルドキュメンタ展の  
 コミショナーなどを勤められた批評家、EDWARD  
 FRY氏、アメリカ版画界の生き字引きとも言うべ  
 き石版画家、HARRY BRODSKY氏などの大物、  
 あるいは長年、アメリカを本拠地として活躍され  
 ているリキテンシュタインなどの作品の刷り師、  
 塚口重光氏、たまたまフィラデルフィアを訪問さ  
 れていた船坂芳助氏などからも新鮮な実制作者と  
 しての体験談を聞くことができた。研究室にはア  
 レクス・カツなどのオリジナルプリントなども

多数あり、ここに居ると現代アメリカ作家の一流  
 どころが身近に存在している感がある。

ここペン大に限ったことでは無いが、アメリカ  
 の大学は国内は元より国外からも実に多くの国籍  
 を持つ学生が集う。そのため彼等が学んだ学校で  
 の版画教育のこと、あるいは版画室の設備等につ  
 いて居ながらにして聞くことのできる特権がある。  
 版画のジャンルはタブローなどと違い製版・印刷  
 などといったいくつかの過程を経て完成に至るた  
 め、そのところどころにこれは使用に価すると思  
 われる素晴らしいアイデアを聞き出すこともある。  
 テキサスからの女子学生が紹介してくれたのは、  
 オーフォルトのアクアチント技法で板上の松脂の  
 粉末を火を用いず板に定着する方法であった。松  
 脂を散布した板を、アルコールを染み込ませたフ  
 ェルト等を張りつけた箱の中に三分から五分間、  
 置くだけで松脂の粉末は溶け板上に付着する。ア  
 メリカの教育機関において、銅板が高価なためか、  
 ジンク板を使用している場合が多く熱を加えると  
 極端に湾曲するジンク板は、松脂を板上に平均に  
 定着することは至難の業である。たとえ定着した  
 としても湾曲した版は腐蝕、印刷あるいは多色刷



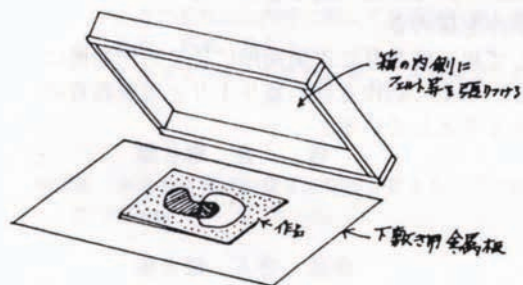
キャンパス点描 アレキサンダー・リーヴァーマンの作品を背景に 左より筆者 右端宮下登喜夫氏





ペン大Faculty clubでの修了制作展

りの見当合せなど不都合、極まりない。この松脂付着箱の方法だと板の湾曲に気を配る必要もまったく無い上、プリントクリーナー、ホワイトガソリン等の揮発性の溶剤を常に用いる版画室などにおいては、火災からの保全のためにもしごく好ましく是非お勧めしたい方法である。フェルト等へのアルコール散布にはスプレー式の容器を用いると都合がよい。アルコールの揮発による臭気を防ぐためにも室内の換気は心がけなければならない。



最後に日本の大学制度と違うところで、特に私が興味を持った二、三の例をあげると、その一つに大学に勤務する教員に対しsabbatical yearと称される制度がある。本来、古代ユダヤ人が七年目に耕作を休んだ安息年を設けたところからきたものであるが、七年に一度、休養あるいは研究のために一年間、あるいは学校により半年間の休暇が与えられる。当然のことながらこの間は有給である。ペン大においては半年間の休暇が与えられもし一年間の休暇を希望する場合には、給料が年間の半額分支給される。

また、アメリカ全土にまたがる美術大学、横のつながりとしてCAA(College Art Association)の組織がある。年二度、ここが発行する小冊子には各大学で必要な求人案内が掲載される。アーティスト又は美術史学者募集と記載され、すぐれた人材を募集するための情報誌となっている。実際には内々で決定されるケースが多いとのことであるが大学のファカルティーを平等に公開している一つの方法となっている。

現在、実際にアメリカの大学、大学間で行なわれているこの二つの制度、Sabbatical year並びにオープンな求人情報は、我々日本の現状と比較し非常にうらやましくも是非、近い将来我が国においても実現していただきたい制度である。



## ▶各大学版画研究室だより



金沢大学教育学部

今井治男

本学における版画は、絵画の中で三年生にエッチング、四年生にリトグラフと一度ずつ体験させている。さて、ここに紹介されるそれは、立派なプレス機を備えた工房であって、大学における授業、研究は確かにそのようであればならないと思っている。しかし「版画」なるものにかゝって、かなりいろいろな教員養成大学を見て来た小生にとって、それは一部の限られた専門大学のみであって、他の多くは貧寒とした片すみの存在でしかないという状態をも認めない訳にはいかない。25㎡位の小部屋にエッチングプレス機一台で、廊下にはみ出してリトプレス機一台とか、プレハブの中で寒さにこらえながらという状態は数多い版画教育の現実である。それでも、その中から素晴らしい新人が誕生し、版画界で活躍するに至っているのであるから、学生達の熱意に脱帽せずにはいられない。このように書くのも、実は本学にも版画工房といえるものはないのであって、この原稿依頼の中に、工房写真をと指定してあって苦笑したのである。しかしなぐさめは、近々新しい地に校舎を新築移転することになっているので、その機会に何とか一室確保を狙って計画中であるということである。

版画教育の充実へ向う一方法は、とにかく素晴らしい作品をつくって、その実績を世に認めさせることにあると考えれば、大学版画展の開催は立派な業績であるにちがいない。そしてそれを世話される方々の努力に敬服しているものである。しかし重ねてお願いできるものなら、東京近辺の一ヶ所の展覧会だけでなく、地方への巡回展も時には計画して欲しいと常々希っているのである。地方の版画意欲、認識はかなりおこなれているからである。そして又、学会としての研究発表の場を拡充し、学会誌の発刊が実現されるよう、その日の近いことを希ってやまないものである。



京都文教短期大学

奥井章夫

本学は女子短大で、児童教育学科、家政学科、服飾意匠学科がある。そして服飾意匠学科の中に服飾専攻と美術デザイン専攻があり、現在美術デザイン専攻は教育美術として美術教育コース、純粋美術として絵画コース（日本画クラス洋画クラス）応用美術としてのデザイン、クラフトコース（デザインクラス、クラフトクラス）の三コースに編成されており、版画クラスとしてはないが、絵画コースとデザインコースの中の1回生は必修とし、2回生は選択として存在する。

版画の種類としては、木版、銅版、リトグラフシルクスクリーンを取りあげている。

時間数としては年間通して週1回3時間2単位としている。

1回生の絵画コースに於ては前期木版、後期銅版の制作をするが時間的な制約もあり、エッチング、アクアチントの技法が主でメゾチント、ドライポイント等の技法までは及ばない。ただ版画では絵画で表現しない平面に於ける空間思考を豊かにすることも大事なねらいとしている。

デザインコースでは、リトグラフ、シルクスクリーンの設備があるが、時間の関係でシルクスクリーンを主としている。

2回生に於ては更に関心を持つ者が残り選択で版画制作を深める。

そして年一度2月に市美術館に於ての作品展に発表し、学生の制作意欲の盛り上がりと美術教育のしめくりとしている。



# ▶ 大学版画学会会則・会計報告

## 会則

### 第1章 総 則

- 第1条 本会は大学版画学会と称する。  
第2条 本会は会員相互の協力により大学に於ける版画教育の進歩発展をはかることを目的とする。  
第3条 本会の事務所は大学の版画研究室におく。

### 第2章 事 業

- 第4条 本会は第2条の目的を達成するために下記の事業を行う。  
1. 機関紙、出版その他、研究調査に関する事業。  
2. 研究協議会の開催  
3. 研究のための専門委員会または部会を設けることがある。  
4. その他本会の目的を達成するために必要な事業

### 第3章 会 員

- 第5条 本会は会員を以て組織する。  
第6条 会員は大学に於いて版画教育にたずさわる者で入会の手続きを完了した者とする。  
第7条 会員は別に定められた会費を納入しなければならない。

### 第4章 組織及び運営

- 第8条 本会の事業を運営するために次の役員をおく。  
1. 会 長 1名  
2. 事務局長 1名  
3. 運営委員 若干名  
第9条 会長は本会を代表する。  
第10条 事務局長は庶務、会計、事務を総括する。  
第11条 運営委員は事業、運営の企画を執行に当る。  
第12条 本会に名誉会員、相談役、顧問、賛助会員をおくことができる。  
第13条 役員は総会において選出する、任期は2年とし再任を妨げない。  
第14条 本会の会議は総会、運営委員会、専門委員会とする。  
1. 総会は年1回開き、本会の事業および運営に関する重要事項を審議決定する。会長は必要に応じて臨時総会を召集することができる。  
2. 専門委員会は内容に即して会長が召集し案件の作製、審議に当たる。  
3. 運営委員会は会長が召集し、本会運営の企画に当る。

### 第5章 会 計

- 第15条 本会の経費は会費及び賛助会費をもってこれにあてる。

### 第6章 入会、退会

- 第16条 入会は本学会員2名以上の推薦者を必要とする。  
第17条 入会は総会の承認を得るものとする。  
第18条 退会は退会届を事務局に提出、総会の承認を得なければならない。

## 附 則

1. 第7条による会員の会費は年額3,000円とする。  
2. 運営のために必要な細則は別に定める。  
3. この会則は昭和49年11月3日よりこれを施行する。

## 会計報告

### ▶ 昭和62年度、63年度大学版画学会決算報告書

昭和61年11月1日～昭和63年10月15日

収入の部		支出の部	
項 目	金額(円)	項 目	金額(円)
前年度繰越金	1,036,588	会 議 費	40,200
会 費	220,000	通信運搬費	235,310
賛助会費	620,000	会報印刷代	255,600
アルバム代金	147,000	雑 費	93,925
作品納入金	500,000	展覧会経費	593,908
雑 収 入	5,549		
収入合計(A)	2,529,137	支出合計(B)	1,218,943
収入合計(A)－支出合計(B)＝1,310,194			
次年度繰越金 1,310,194			

上記の件通り相違ありません。

作成者、会計

咄川孝 印

会計監査

宮下登喜雄 印

会計監査

斎藤寿一 印

## ▶名譽會員名簿

- 小野忠重** 東京都杉並区阿佐ヶ谷北2-25-16  
〒166
- 小磯良平** 兵庫県神戸市東灘区住吉町丸山御影グランドハイツ3-411  
〒658
- 末松正樹** 東京都世田谷区奥沢2-17-22  
〒158
- 田中忠雄** 東京都東久留米市学園町1-14-34  
〒180-03
- 平塚運一** 7207 Connecticut Avenue chevy chase MD  
20015 USA
- 福沢一郎** 東京都世田谷区砧8-14-7  
〒157
- 村井正誠** 東京都世田谷区中野1-6-12  
〒158
- 脇田 和** 東京都世田谷区代田4-14-2  
〒155

## ▶会員名簿

- 相笠昌義** 座間市立野台540  
〒228 TEL.0462-54-0279 多摩美大
- 相沢美則** 杉並区久我山5-1-22  
〒168 TEL.03-334-9562 文化学院
- 青山光祐** 山形市大字七浦497  
〒990-21 山形大
- 秋元幸茂** 滋賀県大津市稲葉台13-10  
〒520 TEL.0775-25-7927 滋賀大学
- 朝比奈逸人** 池田市井口堂3-196 新加納苑103  
〒560 TEL.06-853-4269 大阪教育大
- 天野純治** 神奈川県三浦郡葉山町長柄1601-366  
〒240-01 TEL.0468-75-8689 多摩美大
- 有地好登** 狹山市入曾526-10  
〒350-13 TEL.0429-57-8468 日本大学芸術学部
- 安間寛行** 山口県吉敷郡小郡町大字上郷 山口芸術短大内  
〒754 山口芸術短大
- 池田良二** 武蔵村山市伊奈平5-43-3  
〒190-12 TEL.0425-60-1165 武蔵野美大
- 石井健治** 徳島市中常三島町2-9 常三住宅2-201  
〒770 徳島大
- 稲田年行** 町田市三輪町1939 常葉学園浜松大  
〒194-01 TEL.044-988-3339 武蔵野美術学園
- 今井治男** 金沢市鈴見台4-5-15  
〒920-11 TEL.0762-44-5603 金沢大
- 伊東正悟** 柏市逆井1688-99 造形大  
〒270 TEL.0471-72-7830 常葉学園短大
- 上野秀一** 埼玉県北葛飾郡庄和町大字米島1186-116  
〒168 TEL.03-334-3791 文化学院
- 梅津 薫** 北海道岩見沢市緑ヶ丘4-221-90  
〒068 TEL.01262-4-1975 北海道教育大
- 遠藤竜太** 国立市北2-21-11 武蔵野美大  
〒186 TEL.0425-72-4196
- 大塚恵子** 宮城県仙台市長町2-13-21  
〒982 TEL.022-258-6853 東北生活文化大
- 大槻紀雄** 泉市加茂2-16-19  
〒981-31 TEL.0223-37-3610 東北生活文化大
- 小川正明** 浦和市常盤7-8-18 女子美大  
〒336 TEL.0488-22-2761 武蔵野美術学園
- 大原雄寛** 京都市伏見区日野岡西町4-53  
〒601-13 TEL.075-571-6271 成安女子短大
- 奥井章夫** 京都市左京区下鴨下川原町47  
〒606 TEL.075-791-1668 京都文教短大
- 奥定一孝** 松山市東野5-1-19  
〒790 愛媛大

- 小野克子** 昭島市西武蔵野1388  
〒196 TEL.0425-43-0891 女子美大
- 小作青史** 世田谷区羽根木2-32-6  
〒159 TEL.03-321-7221 多摩美大
- 小山松隆** 千葉県習志野市袖ヶ浦2-6-4-506  
〒275 TEL.0474-74-6586 日本大学芸術学部
- 大本 靖** 札幌市中央区円山西町3-4-3  
〒064 TEL.011-611-0722 北海道教育大
- 岡部昌生** 札幌郡広島町字西の里379-211  
〒061-11 札幌大谷短大
- 鎌谷伸一** 川崎市高津区上作延139-13-837  
〒213 TEL.044-853-1913 女子美大  
武蔵野美大
- 神山泰治** 那覇市首里石嶺町4-173-11  
〒903 TEL.0988-85-5814 琉球大
- 河西万丈** 山梨県大月市猿橋町殿上483-1  
〒409-06 TEL.05542-2-6174 都留文科大
- 河内成幸** 多摩市桜ヶ丘4-26-33  
〒192-02 TEL.0423-71-4687 福岡教育大
- 川西祐三郎** 神戸市東灘区御影山手1-7-11  
〒658 兵庫教育大、奈良教育大
- 加藤清美** 世田谷区桜上水1-10-3  
〒156 女子美大
- 加藤れい子** 埼玉県狭山市入間川4-25-23 ハウス2008  
〒350-13 TEL.0429-53-9174 女子美大
- 加藤茂外次** 愛知県愛知郡長久手町鎌当婦嶽5 ガーデンハイツ104  
〒487 TEL.05616-2-5404 名古屋造形芸術短大
- 加山又造** 横浜市鶴見区東寺尾5-3-29  
〒230 TEL.045-573-6675 多摩美大
- 清塚紀子** 板橋区上板橋2-48-2-808  
〒173 TEL.03-955-2300 造形大
- 木村秀樹** 大津市比叡平3-10-5  
〒520 嵯峨短大
- 木村繁之** 国立市中1-17-1  
〒186 TEL.0425-73-3025 多摩美大
- 小林清子** 川崎市宮前区野川4090-1 野川住宅2-403  
〒213 TEL.044-751-0483 女子美大
- 小林次男** 日野市高幡566 高幡市営団地204号  
〒191 TEL.0425-93-3273 東洋美術
- 小林基輝** 埼玉県三郷市早稲田1-13-10  
〒341 TEL.0489-58-2031 女子美大
- 黒崎 彰** 京都市北区紫竹下園生町19  
〒603 TEL.075-492-2566 京都精華大
- 黒田茂樹** 横浜市金沢区六浦町303  
〒236 TEL.045-781-4715 東洋美術
- 栗本佳典** 日野市高幡707 池田方  
〒191 TEL.0425-93-8926 多摩美大
- 斎藤寿一** 川崎市幸区塚越3-375  
〒210 TEL.044-522-2007 和光大
- 佐藤行信** 武蔵野市吉祥寺東町2-6-10 和光荘6号  
〒180 TEL.0422-21-8992 東洋美術
- 酒井忠臣** 福岡県宗像市市熊1254-35  
〒811-34 TEL.09403-7-0728 九州産業大
- 笹本 純** 秋田市寺内見桜281-4 見桜住宅1-406  
〒011 TEL.0188-33-5261 秋田大
- 坂田和之** 静岡県藤枝市若王子2-14-10  
〒426 TEL.0546-43-5921 常葉短大
- 渋谷和良** 福生市福生1983 アメリカンビレッジP32  
〒197 TEL.0425-52-4892 芸大
- 設楽知昭** 愛知県久手町岩作字三ヶ峰1-1 大学教員住宅4-4  
〒480-11 TEL.05616-2-7447 愛知芸大
- 鴨 剛** 大津市御陵町1-3 別所合同宿舎1011  
〒520 滋賀大



## ▶ 会員名簿

- 清水昭八 小金井市梶野町4-16-27  
〒184 TEL.0423-83-3733 武蔵野美大
- 清水 敦 札幌市豊平区月寒東4条16丁目5-2  
〒004 TEL.011-851-9640 北海道女子短大
- 島田章三 名古屋市昭和区高峰町143-18  
〒466 TEL.052-832-9385 愛知芸大
- 白井嘉尚 静岡県小笠3-4-1 静大宿舎214  
〒422 TEL.0542-84-4531 静岡大
- 白木俊之 茨城県新治郡桜村梅園2-8-13  
〒305 TEL.0298-52-0710 筑波大
- 鈴木広行 名古屋市西区上名古屋1-5-8  
〒451 TEL.052-522-0410 名古屋造形短大
- 清野泰行 世田谷区祖師谷6-26-5 関根荘1-F  
〒157 TEL.03-305-4315 芸大
- 園山晴己 神奈川県茅ヶ崎市下町屋2-9-59  
〒253 TEL.0467-82-5097 造形大
- 傍嶋康博 千葉県船橋市喜野井4-8-14  
〒274 TEL.0474-63-3240 都留文科大
- 田中 孝 大津市比叡平2-14-18  
〒520 TEL.0775-29-0530 京都精華大  
京都芸大
- 田村文雄 小平市学園西町2-12-8  
〒187 TEL.0423-43-7282 女子美大
- 武市 勝 鳴門市里浦町粟津168-2-3504  
〒772 TEL.0886-86-8514 鳴門教育大
- 高山 登 仙台市ひより台47-8  
〒980 TEL.022-243-2605 宮城教育大
- 高橋邦明 大垣市牧町町3-57  
〒503 TEL.0584-71-4101 大垣女子短大
- 滝 純一 宗像市宗像町日の里5-1-4-402  
〒836 TEL.0940-36-0493 福岡教育大
- 滝沢光広 愛知県一宮市大和町代永1219  
〒491 TEL.0586-44-3330 名古屋造形短大
- 棚谷 勲 文京区千駄木3-1-1 団子坂マンション  
〒113 TEL.03-823-5505 東海大
- 為金義勝 府中市武蔵野台2-35-11 信濃荘203号  
〒183 TEL.0423-25-8739 創形美術学校
- 長宗我部友子 大津市比叡平3丁目42-14  
〒520 TEL.0775-29-0376 成安女子短大
- 津地威汎 徳島市中吉野町3-11-2  
〒770 TEL.0886-87-1311 鳴門教育大
- 永井研治 八王子市市安町1-29-1  
〒192 TEL.0426-44-4476 武蔵野美大
- 中林忠良 埼玉県上福岡市駒林437  
〒356 TEL.0492-93-1970 芸大
- 柳楽節子 兵庫県神戸市長田区上池田3-11-12  
〒653 TEL.078-691-8354 兵庫女子短大
- 西 真 京都市北区平野上柳町28-21  
〒603 TEL.075-462-2258 嵯峨短大
- 西村正幸 愛知県愛知郡日進町浅田笹原35-29-60A  
〒470-01 TEL.052-803-4630 名古屋芸大
- 野沢博行 岡崎市明大寺町字塚塚14-2 サンハイツ岡崎A-407  
〒444 TEL.0564-52-8567 愛知教育大
- 野田哲也 柏市亀甲台2-2-4  
〒277 TEL.0471-63-5332 芸大
- 馬場 章 川崎市麻生区高石5-1-26 グリーンハイツ101  
〒215 TEL.044-953-2932 女子美大
- 馬場橋男 横浜市金沢区富岡西4-7-20  
〒236 TEL.045-772-1770 造形大
- 橋本文良 京都市北区紫竹西北町33-12  
〒603 京都精華大
- 塙太久馬 川崎市多摩区塚42-9  
〒214 TEL.044-822-8492 武蔵野美大  
武蔵野美術学園
- 原 健 世田谷区野沢3-13-17  
〒154 TEL.03-421-2980 造形大
- 平川晋吾 宇都宮市峰町247-1  
〒321 宇都宮大
- 広畑正剛 世田谷区赤堤3-5-2  
〒156 TEL.03-324-0532 玉川大
- 深尾庄介 世田谷区下馬3-17-2  
〒154 TEL.03-414-6034 造形大  
跡見短大
- 深沢幸雄 千葉県市原市鶴舞308  
〒294-04 TEL.0436-88-2034 多摩美大
- 福岡奉彦 上越市西城町1-10 西城宿舎1-203  
〒943 TEL.0255-22-0807 上越教育大学
- 吹田文明 世田谷区砧3-33-4  
〒157 TEL.03-417-7123 多摩美大
- 深草広平 佐賀市本庄町西寺小路884-3  
〒840 TEL.0952-22-1751 佐賀大
- 星野美智子 杉並区善福寺1-14-10  
〒167 TEL.03-390-5517 女子美大
- 藤岡 慎 横浜市栄区上郷町1707-19  
〒247 TEL.045-894-4923 多摩美大
- 筆塚稔尚 所沢市上新井784-4  
〒359 TEL.0429-24-1826 芸大  
武蔵野美大
- 藤本俊彦 世田谷区若林2-41-10-201  
〒154 武蔵野美術学園
- 古川仁史 八王子市中野山王2-5-22  
〒192 造形大
- 堀井英男 八王子市宇津木町940-79  
〒192 TEL.0426-45-3756 創形美術学校
- 舞原克典 守山市川田町1548-13  
〒524 TEL.07758-3-0028 京都芸大
- 松川幸寛 松本市空港東区8775-31  
〒390-11 松本短大
- 松浦 昇 金沢市平和町1-3-8(A)3-42  
〒921 TEL.0762-45-3451 金沢大
- 松島順子 大田区田園調布4-29-25  
〒145 TEL.03-721-3062 女子美大
- 松村誠一 府中市北山町3-30-7-103  
〒183 TEL.0425-77-1468 多摩美大
- 丸山浩司 福島市上荒子1-1 上荒子住宅2-202  
〒960 TEL.0245-31-4393 福島大
- 馬淵 聖 神奈川県茅ヶ崎市芹沢2511-2  
〒253 TEL.0467-51-1497 広島大
- 皆川孝一 狭山市北入曾21-3  
〒350-13 TEL.0429-59-2527 日本大学芸術学部
- 宮田克人 高知県高知市小津町10-41-532号  
〒780 高知大
- 宮下登喜雄 府中市新町1-12  
〒183 TEL.0423-61-5634 学芸大  
福岡教育大
- 武蔵篤彦 京都市左京区岩倉中町225-403  
〒606 TEL.075-711-0426 京都精華大
- 村上文生 京都市右京区太秦原面影町6-1  
〒616 嵯峨短大
- 村上善男 弘前市御幸町16-19 北奥舎  
〒036 弘前大
- 森 俊夫 京都府綴喜郡宇治田原町大字岩山小字丸山1-40  
〒610-02 京都文教短大
- 森岡完介 名古屋市昭和区川名本町3-39  
〒466 TEL.052-762-6625 名古屋造形短大
- 山下哲郎 福岡市東区香椎駅前3-17-21 錠鍍坂ハイツ森407  
〒813 九州産業大
- 山野辺義雄 町田市広袴443-10  
〒194-10 TEL.0427-34-5117 東海大

## ▶ 会員名簿

- 山本富章 愛知県愛知郡長久手町岩作三ヶ峰1-1 芸大第3住宅3-5  
〒480-11 TEL.05616-2-7526 愛知芸大
- 山口純寛 世田谷区成城2-36-8-207  
〒157 TEL.03-415-9134 芸大
- 山村国晶 名古屋守山区小幡北山2758-778  
〒463 金城学院大
- 横田嘉雄 岐阜市日野3968-352  
〒500 TEL.0582-47-6552 名古屋女子文化短期大学
- 吉田 東 福岡市南区大字塩原226  
〒815 TEL.092-541-1431 九州芸工大
- 吉原英雄 大阪府高槻市塚原6-18-14  
〒569 TEL.0726-96-2286 京都芸大
- 吉田穂高 三鷹市井ノ頭1-13-40  
〒181 TEL.0422-44-3923 女子美大  
日本大学芸術学部
- 吉本 弘 愛知県愛知郡日進岩崎元井ヶ7-97  
〒470-01 TEL.05617-2-3565 愛知芸大
- 若生秀二 日野市旭ヶ丘1-20-19 泰山荘C-201  
〒191 TEL.0425-83-0481 造形大
- 渡辺達正 八王子市鹿島22-1-208  
〒192-03 TEL.0426-75-1655 多摩美大
- 若杉雅夫 愛知県西春日井郡豊山町豊場志水70  
〒480-02 TEL.0568-28-3852 東海女子短大

## ▶ 一般会員名簿

- 朝比奈則江 静岡県焼津市浜当目1-5-28  
〒425 TEL.0546-28-6517
- 東谷武美 埼玉県上福岡市駒林436-3  
〒356 TEL.0492-63-4779
- 出原 司 京都市中京区姉小路堀川東入ル  
〒604 TEL.075-221-5658
- 梅津祐司 板橋区蓮沼7-7 ハスマアパルトマン  
〒174 TEL.03-965-8918
- 梅沢和雄 大宮市植竹町1-537  
〒330 TEL.0486-66-4238
- 太田 広 神奈川県横浜市旭区鶴ヶ峰1-28 C-21号  
〒241 TEL.045-371-2561
- 岡部徳三 神奈川県泰野市渋沢158  
〒259-13 TEL.0463-88-0743
- 北岡文雄 杉並区和泉2-27-8  
〒168 TEL.03-328-8361
- 木村希八 鎌倉市山崎1350-4  
〒248 TEL.0467-45-2223
- 久保卓治 相模原市上鶴間7-8-1-519  
〒228 TEL.0427-48-7769
- 佐藤逸平 鎌倉市台4-13-12  
〒247
- 杉原康子 名古屋市昭和区山里町74-522  
〒
- 高橋貴和 宮城県名取市名取ヶ丘5-1-1  
〒981-12
- 多田益也 広島市佐伯区五日市町五月ヶ丘3-14-6  
〒738-08
- 燈野寿蔵 愛媛県伊予市瀬町4丁目  
〒799-21
- 長谷川光輝 藤沢市辻堂西海岸2-12-4-213  
〒251 TEL.0466-33-6758
- 浜西勝則 泰野市千村742-15 小田急渋沢ハイツ1-508  
〒259-13 TEL.0463-87-3779
- 萩原英雄 中野区上高田5-33-8  
〒164 TEL.03-386-0192
- 三木淳史 市川市平田1-13-2  
〒272 TEL.0473-22-1948

## ▶ 一般会員名簿

- 森 正一 静岡市西千代田町1-17  
〒420
- 渡辺 満 町田市成瀬4-26-4  
〒194
- 若月公平 東村山市美住町2-11-1 小山マンション10E  
〒189 TEL.0423-91-6407 武蔵野美大

## ▶ 賛助会員名簿

- 新日本造形 中野区新井1-42-8  
〒165 TEL.03-389-1221
- サクラクレパス 台東区蔵前3-20-2  
〒111 TEL.03-862-3911
- 日本版画保存会 川崎市多摩区登戸3460 吉沢英哲方  
〒214 TEL.044-911-9041
- 渡辺木版美術画舗 中央区銀座8-6-19  
〒104 TEL.03-571-4684
- 山田 商会 中央区八重洲2-6-10  
〒104 TEL.03-281-1667・8537
- 萩原市蔵商店 千代田区神田紺屋町43  
〒101 TEL.03-256-3591
- 芸大画翠 台東区上野公園12-8 東京芸術大学内  
〒100 TEL.03-821-7056
- べんてる 千代田区東神田2-1-6  
〒101 TEL.03-866-6161
- ギャラリーカプセル 中央区銀座8-16-10B401 堀江強志  
〒104 TEL.03-541-4676
- 丸の内画廊 千代田区丸の内3-2-3 富士ビル1F  
〒100 TEL.03-213-8705  
(移転先不明)
- 文房堂 千代田区神田神保町1-21  
〒101 TEL.03-291-3441
- 日動画廊 中央区銀座5-3-16  
〒104 TEL.03-517-2553
- 画荘ヴィナス 新宿区西新宿1-15-13 胖ビル内  
〒160 TEL.03-346-2728
- 画箋堂 京都市下京区河原町五条上ル  
〒600 TEL.075-791-6131
- クラタ商店 大阪市鶴見区茨田諸口町1118  
〒538 TEL.06-911-6561
- 酒井民雄 大垣市郭町3丁目 酒井書店  
〒503
- 菊田商店 文京区本駒込3-8-2  
〒113 TEL.03-821-7131
- 武蔵野美術学園 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7  
〒180 TEL.0422-22-8176
- シロタ画廊 中央区銀座7-10-8 高橋ビル地下1階  
〒104 TEL.03-572-7971~2
- 養清堂画廊 中央区銀座5-5-15  
〒104 TEL.03-571-2471
- 阿部出版版画芸術 目黒区上目黒4-30-12  
〒153 TEL.03-715-2036・2046
- 日本オリヴィエ 新宿区本村町市谷2-6 B&Mメモリアルビル  
〒162 TEL.03-267-3811
- マルマン株式会社 中野区中央1-23-7  
画材部 〒164 TEL.03-371-1303

(順不同)



## ▶編集後記

13回大学版画展に合わせ、なんとか18号を発行出来ました。しかし編集方針を検討する余裕もなくただ皆様からの原稿をそのまま掲載するだけで精一杯のありさまでした。

まず前回及び今回の大学版画展での技法研究発表を各先生にまとめていただきました。なお鹿取氏の技法研究は次号へも続きます。御期待下さい。

また浜西氏のペンシルバニア大学での研修報告は大変興味深い内容でした。今後も国外の大学の版画教育に関する記事を取り上げられたらと思います。

短期間での原稿依頼にもかかわらず、快く引受けて下さった諸先生に深く感謝致します。

(小川正明)

大学版画学会 会報18号 1988.12

編集スタッフ小川正明／為金義勝／皆川孝一／  
筆塚稔尚

発行 大学版画学会

印刷 日宣広業(株)

▶ 会費名簿

Table with 2 columns: Name and Amount. Includes entries like 山本 太郎, 田中 花子, etc.

▶ 一般会費名簿

Table with 2 columns: Name and Amount. Includes entries like 鈴木 一郎, 高橋 美穂, etc.

▶ 一般会費名簿

Text block containing names and amounts, partially overlapping with the header.

▶ 特別会費名簿

Text block containing names and amounts, partially overlapping with the header.

▶ 特別会費名簿

Table with 2 columns: Name and Amount. Includes entries like 佐藤 健一, 渡辺 真理, etc.

大学版画学会

事務局 日本大学芸術学部美術学科 版画研究室内
〒176 東京都練馬区旭丘2-42 TEL. 03-972-2111 (内線238)